

# 麗澤に学んで



令和5年度

麗澤高等学校

## 麗澤高校の道徳教育

麗澤高等学校では、毎朝のショートホームルームにおいて、教室に掲げた『心のカレンダー』（本校の教育理念の根幹である「モラロジー」の内容を、カレンダー形式に31の格言にまとめたもの（公益財団法人モラロジー道徳教育財団刊））を生徒が読み上げることから一日がスタートし、週に1時間全クラスで道徳の授業を行っています。この授業は本校の人間教育の大きな柱をなし、クラス担任が中心となって進めています。授業は、テキストである『最高道徳の格言』（本校の創立者である法学博士廣池千九郎がまとめた格言集。公益財団法人モラロジー道徳教育財団刊）に掲載されている格言についての生徒による研究発表から始まります。これに続いて、「モラロジー」を土台として「感謝の心、思いやりの心、自立の心」を育むことを念頭に、本校の教員がそれぞれの知識や経験に基づいて授業を展開します。

一方で、男子寮・女子寮では学園創立以来、道徳を実践する場としてのモラロジー教育・麗澤教育が脈々と受け継がれています。朝礼・夕礼、規律正しい集団生活を通して、父母・祖先・および恩人に感謝する心、相手を敬い思いやる心、率先垂範の心がけなど、様々なことを学んでいます。

ここでは、令和5年度卒業証書授与式における卒業生代表答辞、最上級生による「高校生活をふりかえって」、寮生による「寮生活で学んだこと」（保護者学級で発表した体験発表、格言研究として夕礼で発表した内容など）、タイスタディツア一参加生徒による感想文などを紹介させていただきます。

長く厳しい冬の寒さも和らぎ、優しい春の光が差し込む季節となりました。本日はご来賓の皆様、保護者の皆様のご臨席のもと、このように盛大な式典を催していただくことに、卒業生一同心より御礼申し上げます。

思えば、私達卒業生は本当にそれぞれが自由に心豊かな学校生活を送ってきたので、ここで私が共通して語ることができる思い出というのはそう多くはありません。親友と眺めた長崎鼻の美しさとか、友達と何時間も熱く議論を交わしているときのあの高揚感とか、その思いやりに触れたときの感謝の思いとか、そういったかけがえのない高校生活の思い出は、それぞれの胸の中に大切にしまっておくべきものでしょう。しかし、私達六年生には、共通して、この一年間、全員が真剣に向き合い続けてきたものがあります。それは、「選択」、選び抜くということです。

「お前は、自分が生きなければならないように、生きるがいい」

この言葉は、ロシアの作家、レオニードレオーノフの「穴熊」という作品の中でとある年老いた帽子屋が語った言葉です。そして、2011年に京都大学から、受験生として2024年の今を生きる私に贈られた、メッセージとして入試問題「失われた時代」の中で出会った言葉でもありました。

「お前は自分が生きなければならないように生きるがいい」

「生きるというのは、生の持つあいまいさ、貧しさ、複雑さを、つまりわたしたちの世界にはなにかしら欠けたものがあるという酸っぱい思いを切り返し、切り返し生きていくということなのだから。」

進路選択のみならず、まさに生きるとは本当に選択の連続なのかもしれません。改めて振り返ってみると、私達の選択は、ときに辛いものでもありました。私達はある結果を目指して選択をするけれど、その選択が私達の意図した結果を齎すとは限らないし、むしろ何が正しいのかなどわからないままする選択がほとんどであったような気がします。それでも私達はここ麗澤で「選択」をし続けてきたのです。今までの選択によって齎された深く数え切れない後悔と、その後悔から深く学んだことを大切に胸に刻みこみながら、絶えず選択を重ね続けてきたのです。なぜなら、私達にはいつも、その選択の先に、希うものがあったから。そして、その希う尊いものに出会うチャンスをくれたのは、学友でもあり、また、この学校の先生方でもありました。私はこの麗澤という学校で、数学の美しさに出会いました。小学生のころ算数が苦手だった私にとって、数の世界は、単にテストで処理しなければならない対象でしかなかったけれど、麗澤で、心から尊敬できる恩師と出会い、微分積分というものに興味を持ち、微分積分に向けてひた走り、そして、とある世界一美しい公式を証明した瞬間、私は既に数学に魅せられてしまっていたのです。数というものを、数というものによって織りなされる世界を、愛してしまったのです。そして、そこからの選択は、すべて数の美しさ、学んで知ったその世界の美しさを求め導かれてのものだったと思います。私のように、学んで知った世界への深い思いから、進路を選択された諸先輩方、そして同級生も多く

いると確信します。選択とは、ときに、辛いものです。けれどその選択を、自分のなさなければならぬ選択をし続け、自分が生きなければならぬように生きようとし続けた特にこの一年間は、今振り返れば本当に素晴らしいものでした。だからこそ、一つ一つの大切な選択を通して、自分が生きなければならぬように生きさせてくれるなにかを得られたことを、とても幸せに思います。

そうした学びの環境を与えてくださり、私達の意味と選択を尊重してくださった先生方、ありがとうございました。また、集中してしまうとどうしても見えなくなってしまうかけがえのないものを照らし続けてくれた私の友人。心からの感謝を。本当にありがとう。そして保護者の皆様、お父さん、お母さん。私達は六年生というかけがえのない選択の年に終止符を打ち、また新たな場所へと旅立ち、そこで生きるべきように生きていきます。私達がこうして私達のなすべき選択ができるようになるまで、私達を守り、育ててくれたこと、そして私達の選択をいつどんなときもサポートするという選択をしつづけてくださったこと、そしていつどんなときも私たちの選択をサポートする、という選択をしつづけてくださったこと、一生忘れません。本当にありがとうございました。

最後になりますが改めて、本日ご臨席賜りました理事長先生、ご来賓の皆様、校長先生をはじめとする教職員の皆様、在校生の皆さん、そして保護者の皆様。このような盛大な式典を催していただいたこと、心より御礼申し上げます。皆様のご健勝・ご活躍と、麗澤高校の輝かしい発展を願い、卒業生 229 名の答辞とさせていただきます。

無我の心はじめてよく良果を生ず

6年生 高崎 優太

麗澤での 5 年間で振り返って、私は自己実現と周囲への態度に対する意識が大きく変わりました。中学一年生に編入試験を受験した私は他の一貫生とは約一年遅れで麗澤に入学をしました。既に出て上がっている人間関係の中での滑り出しは最初こそ好調でしたが、授業進行の速さについていけなくなり、次第に余裕と自信を無くしていきました。「自分は編入で入った優秀な生徒なんだ」という自分への過度なプライドが肥大したことで人当たりが悪くなり、与えられた課題や部活に一切責任を持たずに過ごすようになりました。今までに経験したことのない挫折を味わった私は、あろうことか自分を顧みることなく他責思考に陥り、ただ学校と家を往復するだけの無味乾燥な生活を送る中学時代を送ることとなりました。しかし、そんな私にも幸か不幸かコース選択の時期がやってきます。二年間、自堕落な生活を送り続けた私にはもちろん選択の余地はなくコース変更の文字が大きく眼前に突きつけられました。それまで大きな挫折もなく、人から与えられたものをなんとなくこなしてきた私にとっては当然の結果であると同時に、大きな屈辱となって押し寄せました。高校入学直後、私は決意しました。「今までの自分を取り戻してやる、いや、変わってやる」と。何が自分をそうさせたのかは分かりません。まずは、これまでの失敗としっかりと向き合うことから始め、高校生活の目標をしっかりと定めることにしました。

学習面では、英検準一級合格や苦手科目の克服などを目標に、そして生活面では常に謙虚な姿勢で周りへの感謝を忘れずに過ごすことを意識しました。特に、学習面では自分の能力や勉強法を過信せず、良い意味で常に自分を疑う姿勢を持つことで目標であった英検合格を達成することができました。また、高校時代は学習面だけでなく様々な面で非常に充実した三年間となりました。行事面では、自分の与えられた仕事に責任を持つだけでなく周りの状況を把握しながら、何が自分に求められているのかを考えながら周りの人と協力しながらかけがえのない楽しさを共有することができました。特に五年次の文化祭では、企画を担当して何回か一人で仕事を抱え込んでしまったことはありましたが、クラス一人ひとりに明瞭なタスクを与え、積極的に声掛けしながら進めたことでクラスの一体感を高めることが出来ました。SDGs 研究会の活動では、四年次はマレーシアのパーム油産業の課題を英語を通じて海外の学校とオンライン上で交流をしたり、外部でのコーヒーの販売を行いました。五年次からは、自らの海外経験と SDGs を融合させたいと思い、フェアトレード紅茶の商品開発を行いました。商品開発を通じて、自分の海外経験を振り返るだけでなく、活かすことが出来たのはとても良い経験となりました。引退の前には同じ部活の仲間とともにメディア出演やラジオの収録を通じて、自分たちの考えや活動を世に発信しました。自分たちの活動の蓄積が他の人や社会の意識を変えることができるというのは大きな自信に繋がり、将来の夢へと一歩近づくことが出来ました。ここまで自分が高校の生活を実りあるものに出来たのは、自らの努力によるものだけではありません。クラスメートを始めとした素晴らしい友人関係があったからこそ、自分は再び良い方向へ戻れたのだと思います。自分は本当に周囲の人に恵まれました。自分が何か良くないことをしっかりと指摘してくれる友達や、常に自分の可能性を信じて努力する友人の存在は、自分にとっての理想像であると共に彼らと過ごす学校生活は測りきれないほど楽しく、学びになりました。最後になりますが、麗澤での生活は挫折もありましたが、それ以上に得るものがたくさんありました。高校で得た絶対に諦めない姿勢や常に周りに感謝する心、成功体験を昇華して社会に羽ばたいていきたいです。

高校生活を振り返って

6年生 金子 芽生

私にとって高校生活三年間は、自分自身の価値観や視野、物事を捉える力を大きく変える三年間でした。自分が興味を持ったことをとことん突き詰めることで新たな視野を得ることができたり、周りの人々が支えてくれているということのありがたさを実感することができました。

高校では SDGs 研究会、チーム ICT に所属し、企画などのリーダー、行事を配信するときの総監督として活動しました。双方で自分の力量や努力不足、視野の狭さを実感することが嫌というほどあり、改善したいと思っても上手く行かないことが多くありました。それでも、自分には高校生になるまで、勉強や美術部の作品一つをとっても自分で決めた目標を最後までやり切るという経験がなかったので、高校生からはそんな自分を変えたいと思い、引退ま

でに投げ出さずに最後までやりきりました。一つのことから逃げ出さなかったという事実と経験は、高校三年生になったときに自分の自信に繋がりました。

また、麗澤高校の先生方の協力があったからこそできた勉強以外での経験もたくさんありました。高校二年生の春、プログラミングの勉強をしたいと考えていたところ、たまたま教室で大学の高大接続プログラミング教室のポスターを見かけて参加することにしました。参加するためには小論文を書いて審査に通る必要がありましたが、先生の協力もあり審査を通過して参加することができました。参加する前までは、機械を触るのが好きだから情報系の大学に進もうと漠然とした考えしかもっていませんでした。しかし、この教室の参加をきっかけにどうして情報系に行きたいと思ったのか、そのきっかけは何だったのか、この先何を研究したいのかをじっくりと考える機会ができ、将来に対する目標や勉強をすることの意義を見出すことができました。そして、様々な学校から来た生徒と協力して作業をすることで、意見交換の大切さや色々な人がいて色々なものの見方があるということを知ることができました。

この三年間、勉強に取り組むだけではなく自分の興味を広げたり、好きなことを突き詰めるという経験を通じて、自分の視野を大きくし将来やりたいことを明確にすることができました。普通に学校生活を送っていたら体験できないようなことを体験したり、知らないような面白い知識を得ることがたくさんあり、改めて振り返ってみるとたくさんの人に支えられていることを実感しました。これからの人生でいままで支えられた分、周りの人に返して行けるようにできることを一つ一つこなしていきたいです。

## 私の高校 3 年間

6 年生 池崎 美誉

今、改めて高校生活を振り返ってみると、3 年間は本当に本当に濃密であった。10 年間分、生きた気がする。それくらい、自分は成長できたし、麗澤での生活なしに今の自分はいないと思う。

私の高校生活の約 7 割は、ラグビーであった。オフは木曜日のみ、放課後すぐに部室に向かい、6 時半まで練習。家に帰る頃には 9 時を過ぎることがほとんどだった。クラスの友達が「今日さ柏行かない？」と言っているのを聞いて、何度羨ましいと思ったことか。

ラグビーは人と人が生身でぶつかる。不安や恐怖を捨てて、仲間のためにチームのために体を張ってトライを目指す。結局は自分の心との戦いである。心の持ちようで、プレーが大きく変わってくる。「ラグビーは人格のスポーツ」。ラグビー部の監督が 3 年間ずっと言い続けていた言葉である。私はこの言葉をすごく大切にしていたし、そう信じてプレーしてきた。時には自分に負けてしまうこともあった。怪我の痛みであったり、なんだかやる気がおきなかったり。そうすると、プレーもなんだかうまく行かない。相手を抜かせない、タックルをきれいに入れない、ボールも落としてしまう。確かに、スキルが足りないのかもしれない。でも、能力やテクニックだけではなく、自分の心の芯の部分もやはり大切なのである。「誰よ

りも声を出そう！」「低くタックルするぞ」「いいキャッチをしよう」「絶対にトライを取って勝つ」なんでもいい。一人では無理なら、仲間とお互いに鼓舞し合えばいい。そうやって、チーム一人ひとりの情熱が合わさって合わさって、何倍も何十倍も力になるのである。高校1年生のときの全国大会で負けていた状況下、途中出場して、逆転につながるトライを決めた。チームのために絶対絶対勝ちたい、私にかかっているんだ。そう思って、思いっきり走ってトライをした。本当に嬉しかった。あのときの気持ちは一生忘れない。

練習もきつかったし、怪我也多かったし、正直何度もやめようと思ったが、3年間続けられてよかった。苦しいことの方が多かったが、毎日の練習の中で楽しいこともたくさんあった。一生付き合っていけるような友達もできた。本当によかった。

そして、私はここにどうしても書きたかったことがある。それは麗澤の先生のことである。メンタルが弱く、精神的にきつくなってしまうときに真剣に向き合ってくれた担任だった折笠先生、中根先生。よく怒られる事もあったが、私自身、先生のことを凄く信頼してたし尊敬していたし大好きだ。私が、総合型選抜に落ちてしまい、すぐに次の推薦を受けることになったとき、朝から学校で志望理由書づくりに追われていた。その時に、部活動の合間をぬって和田先生が指導してくれたり、学年の先生方が「頑張っているねー」と声をかけてくれたりした。本当に感謝したし、嬉しい気持ちでいっぱいだった。「こんなに自分を応援してくれている人がいるなら、頑張らなければ」と思った。面接練習でも丹羽先生が、熱く厳しく丁寧に指導してくれた。受験期になってから改めて先生たちへの感謝の気持ちが強くなった。本当にありがとうございました。

私には、中学校の保健体育教員になるという夢がある。この3年間で、より明確になった。子どもたちの新たな可能性を引き出せるような教員になりたい。麗澤での学びは、私の人生にとって本当に重要なものだった。自信をもってそう言える。またいつか、今度は教員になった姿で、訪れようと思う。

寮生活で得たこと

6年生 伊藤 楓菜

高校生活は大変学ぶことが多い三年間でした。私は寮生活であったこともあり、人間関係で悩むことが多かったですが、その代わりそこでの経験から得た学びは大変大きいと感じています。寮で学んだことの1つ目は、自分を知る機会を得たことです。様々な性格の仲間と深く関わったことで、一人ひとりの価値観の違いは育ってきた環境の違いからだということを知りました。それにより、自分の育ってきた環境の何によって今の自分はあるのかということを考え直すことができました。また、仲間との生活で起きた問題解決の過程での対話は、自分と向き合う時間を増やし、自分を客観視する視点を持つたと思います。それは、人間関係や日常生活で行き詰ったときにそこから自分を引き上げる助けに繋がりました。これらは自分の性格や特徴を知るきっかけとなり、そのことで自分をコントロールしやすくなった気がします。

2つ目は、思いやりの心の大切さを知ることができたことです。家族相手では許されるような発言や態度でも、寮では自分のちょっとした言動次第で相手を傷つけてしまうことがあります。普段はあまり深く考えていないと思いますが、自分がする行動は少しのことでも周りに大きな影響を与えたいと思います。それは、自分でプラスに働かすことも、マイナスに働かすこともできます。マイナスに働かせれば、相手との関係が悪くなったり、傷つけたりなどの悪循環が生まれてしまいますが、プラスに働かすことができれば、お互いが元気よく、風通しのよい生活が送れます。また、その中でも特に思いやりが大切だと思います。仲間と生活していく上で相手の気持ちを考え生活することは、一見、相手のためだけの行動のように思えますが、最終的には自分のためにもなります。改めて感じたことは、自分が生きやすい環境は、自分で作り出さなければなりません、他者の支えも重要であることを感じました。精神的に強くても、自立していたとしても、自分が周りへの思いやりの量で自分が受ける他者からの思いやりの量が決まってしまうのではないかと思います。自分が周りに与えた思いやりの分、周りはそれに答えて自分の助けになってくれます。つまり、相手のためだけでなく自分のためにも、思いやりは重要だと私はこの寮生活で気づきました。今こうして色々な体験をさせてくれ、たくさんの気づきを与えてくれた寮にとっても感謝しています。高校三年間の経験を活かしてこれからも頑張っていきたいです。

#### 保護者学級における体験発表

6年生 大野 正悟

今回で私が寮体験の発表をするのがおそらく最後なので寮での三年間で得た変化についていくつか発表したいと思います。

寮の中で心の支えとなったのはやはり同級生の存在でした。同級生3人は育った環境や考え方がほんとに違いました。家族以外で毎日一緒に寝食をともにする人は人生の中でいた事はなかったので、毎日一緒に暮らしているとももちろん相手の悪い面が見えてくるし、私の考え方と違うことをしているときはイライラすることもあります。でも私と考え方が違う人と一緒に生活することで自分の考え方がこれまでよりも広くなり、割と色んなことに対応できるようになったり、自分の考え方が正しいのか見返すことができたりしました。特に記憶に残っているのは最上級生になり寮のルールをどうするか同級生の中で話し合っていた時に、私はこれまでの人たちがやっていた通りにやろうという保守的な意見なのに対して、他の同級生はこれまでとは全く違う切り口や考え方でルールを提案してきました。その御蔭で自分の視野が狭まっていたことに気づくことができました。他にも私のことを客観的に見てくれて、助言してくれたり相談に乗ってくれたりしたこともありました。部活が本当に辛くて心が疲弊しきっていた時に「大丈夫？」と声をかけてくれたのは本当に嬉しく助かりました。そんな学校の友達とは違う、自分と考え方が違うけれど近くで自分のことを見せてくれていて支えてくれる同級生ができたのは本当に幸せな事だし、卒業するまでも卒業してから大切にしていこうと思います。



次に他の学年の存在が私のことを成長させてくれたと思います。私が寮に入ったときの5、6年生の背中はとても大きいものでした。しっかりしている上級生、だらしない上級生、寡黙な上級生、元気で空気を明るくするのが上手な上級生、色々な上級生がいました。でもどんな上級生にも見本になるような点があり、そんな人たちを間近で見られたのはとてもいい経験でしたし、私が上級生として生活する指標にできました。下級生の存在もまた私を成長させてくれました。部活動の上下関係とはまた違う寮のなかで、距離感の取り方や伝えること、まとめることの難しさを感じました。特に「伝える」のはとても苦労しました。下級生指導の時、はじめの頃は少し厳しい口調で相手に何が悪かったか一方的に伝えるだけでした。ただその方法だと相手の一時的反省にしか繋がらず、本当に相手のためになっていませんでした。そのことに気づいてからはただ厳しい口調で伝えるのではなく「何がダメだったのか」「なぜダメだったのか」を自分の中でよく考え言語化し、また「次どうすべきなのか」を一緒に考えていくようになり、そうすることで相手に上手に伝えられるようになりました。他学年との関わりは、目標を作り自分を見直す事ができるよう、自分を成長させてくれました。

最後に勉強で一番大きな変化がありました。中学までは家では勉強は全くと言っていい程しないか、しているふりでした。寮に入り約三時間の勉強時間のお陰で嫌でもなんでも勉強するようになり、机に向かう時間が増えました。また勉強でも同級生、上級生の存在が大きかったです。同級生の中で点数などで競い合うことも、苦手なところを教えてもらったりもしました。身近に自分より点数が高い人がいるとその人よりいい点取れるようになろうとやる気になりましたし、またその人の勉強方法を見本にして自分の中に取り込むことができ、次第に苦手教科の勉強も得意とまでは行かないけれどもそこそこ出来る教科になりました。上級生、特に受験生の六年生と同じ空間で勉強し、勉強法やすべきことを聞くことができたのは寮だからこそできた経験で、自分のこれからの受験勉強にとってもとても大切なことでした。これらのお陰で最初の頃は学年の最下層だった成績も、胸を張れるぐらいのものにはなりました。

この三年間で得てきたこれらの経験は通学生では手に入れるものではありませんでした。親が半ば強引に寮に入れてくれたのは、今ではありがたいと思っています。これから一年もありませんが残りの寮生活も頑張っていきたいと思っています。

篤く大恩を念いて大孝を申ぶ

6年生 田中 寛乃

この格言は、多くの人の手助けによって自分が今ここにいることの有難さを思い、先人方に感謝し、安心していただけるように心がけようという意味があります。

私はすぐ近くに互いに助け合える仲間がいることのありがたさと家族の大切さを強く実感しました。特に最近強くそのことを実感したのは父が亡くなる時期のことでした。

父が何度も「亡くなるかもしれない」という状況になるも何度も持ち直し、を繰り返し、

いつかそうなる(人は誰でもいつか亡くなる)と分かってはいたものの実際にそのことが差し迫ると本当に亡くなってしまうという現実を受け止めきれずにメンタルが不安定になっていました。そんなときに私の話を聞いてくれ励ましてくれる寮の同学年、いつも元気に挨拶をしてくれる他の寮生(や話しかけてくれるクラスメイト)、そして親身になってくれる先生方がいました。そんなみんなから元気をもらって今日まで生活することができています。父が亡くなった際にも寮生やクラスのみんなからたくさんの励ましのメッセージをもらい本当に嬉しかったです。あの時は本当にありがとうございました。

そして父の死によって命の大切さを改めて感じました。父がもう体を動かすことができない状態になってからずっと「やりたいことはたくさんあるけれどやるだけの元気がないんだ」と言っていて私は悲しくなりました。

死を意識して初めてわかる命の大切さ、そしてその儚さがありました。命は人によってその長さが違います。父の死を意識したことが、自分がこれから何をしようか、いつまであるかわからないこの命の終わりまでに何をしたいか、そして今の自分に何ができるかを考えるきっかけになりました。父は最期まで"生きたい"と言っていました。父が亡くなったときその言葉を思い出して「父は人生を楽しむことができたのだろうか」と考えました。生前「たくさんやりたいことがあるんだ」と言って、やることリストを作成しました。けれど心はやりたくても体が思うように動かずやりたいことがやれずに終わってしまった父がとても気の毒でした。私の家族は家族旅行などみんなでやりたいことがあっても「今年は忙しかったから来年できたらいいな」となってやらずに終わることが多いです。ですが父の死から後悔のない人生を送ることの大切さを学びました。私は、父の死から、できるときに精一杯できることをやろうと思いました。ですが、父の死から一人では立ち直れなかったように、人は一人では生きてゆけないし人の助けが必要なこともあります。辛いことでしたが戻ってきたあともみんなが声を掛けてくれたおかげで、ゆっくりとでしたが立ち直ることができつつあります。人生は泣いても笑っても一度きりです。なんでもない日のように思えた日も実は特別だったのかもしれない。どんな日でも助けてくれる人たちに感謝の気持ちを持ちながらやりたいことをやれるときに全力で取り組みたいと思います。それが、父が死をもって教えてくれたことです。

寮生活で得た宝物

6年生 諫山 倫果

女子寮が大好きだ。本当にありがとう。

3年間が終わろうとしている今、この言葉が思い浮かぶ。寮生活で得た宝物は「自分」だと思う。人を好きだと言える自分。誰かのために動くことを喜びだと感じられる自分。自分の目標のために、そして人の役に立つために努力することができる自分。人と協力し何かをやり遂げることに幸せを感じられる自分。これから一生人生をともにする自分を深く知り、自分に自信を持つことができたのは、紛れもなく寮での人との出会い、そしてその人たちとの

深い関わりからだと断言できる。

まずは、同級生。3年間寮生活を共にしながら、それぞれの考えを伝えあい、受け取りあってきた。同級生との関わりを通して私の価値観は大きく変わった。例えば、私が「善」としたことが、相手にとっては「善」ではなかった。「自分だったらこうするのに。なんでそんな態度を取るのだろう」と悩むこともあった。だからこそ、世の中には、色々な境遇の人がいて、みんな様々な人生を歩んでいるということを知った。最初は、一人ひとりの違いに戸惑い、悩むこともあったが、少しずつ他人の状況を理解し受け入れることができるようになった。そして、一人ひとり違って当たり前。だから、一緒に生きていくのだ。助け合うのだ。成長していくのだ。と知ることができた。

受験を終えた同級生が12月に寮に居なくなって強く実感した。この7人は私にとってとてもとても大きな存在だ。意見が合わなくて気まづくなったり、衝突したりしたこともあったけれど、どんなときにも傍にいてくれて、嬉しいときは一緒に喜んでくれて、くだらないことでお腹を抱えて笑い合って、泣いていると私の背中をさすってくれた。それぞれが未熟で誰かの助けを必要としていたからこそ、私達は互いに助け合う必要があって、寄り添う必要があった。その時間、一瞬一瞬が、今の関係性を作り上げてくれたと思う。7人との関わりを通して、私の考えは確立されていったし、将来の夢を持つこともできた。感謝してもしきれない。これからは、それぞれの道に進み少し関係性が変わると思うが、いつでも寄り添ってくれて、だめなときはしっかりと叱ってくれ、会うとすぐに高校時代に戻ることができる存在なのだと思う。そんな7人に会うことができると本当に嬉しく思う。

そして、上級生からは人生の目標を持つということを学び、その姿から「自分」のこれからを考えることができるようになった。さらに、下級生の存在もとても大きく、下級生の存在が私に「下級生に寮生活を楽しみ、充実させてほしい」という思いを芽生えさせ、より良い寮生活にしようと思わせてくれた。先生方からは、自分と周りを大切にする精神を学んだ。このように、寮生活の中での様々な人との深い関わりから自分を見つめ直し、自分を成長させることができた。

4、5年生に伝えたい。寮生活は、自分で考え行動しなければ何も変わらない。「自分は目の前の人のために何ができるのか。」「寮のために何ができるのか。」を考え続けてほしい。人との関わりを大切に、自分と向き合ってもらいたい。そして、3年間を通して一つでも多くの宝物を見つけてほしいと心から願っている。高校生は一度きり。「今」この瞬間も一度しかないのだから！

まだまだ未熟だが、この3年間で私は「自分」を知り、自分の「生き方」を身につけることができた。だから、どこに行ってもどんな人とも、やっていけるという自信が持てるようになった。3年前、私は両親に「大きな人間になる」と言った。この3年間を通して、少しは大きな人間になれたのではないかと思う。これからも、多くの人を笑顔にできるさらに大きな人になれるよう、自分と人との関わりを大切に日々成長していきたい。

私はタイスタディーツアーを通して、自分が置かれてる環境の豊かさに改めて気づかされました。

まず、生活環境についてです。スラム街や温泉プールの近くのトイレなど、様々な場所でトイレに行きましたが、空港のトイレ以外は衛生環境が悪かったです。その理由については文化の違いがあります。日本ではトイレットペーパーで拭いて流しますが、タイの人々は桶にくまれた水で流し、その後トイレットペーパーで拭くのが普通です。そのためトイレの中や便座はビショビショのことが多いですし、備え付けのトイレットペーパーはほぼありません。

また、私たちが宿泊していたメーコック財団のシャワーは途中からお湯が水に変わってしまいます。メーコック財団の子どもたちのお風呂事情を聞いたところ、毎日冷水を浴びてシャワーを済ませていると言っていました。私はそれを聞いてとても衝撃を受けました。タイと聞くと暖かいイメージがあると思いますが、バンコクなどは昼夜関係なくあったかいですが、メーコック財団はチェンライというタイの北の方、標高の高いところにあるため昼夜の寒暖差がとても激しく、昼が30℃前後、朝晩が10℃以下になります。夜の寒い中水浴びをしている状態ですので、温かい湯船に浸かって疲労回復をする日本での入浴とはかけ離れています。トイレやお風呂など生活の基本的な部分から、日本で当たり前であったことがタイでは当たり前ではないのだと気づきました。

次に、食事についてです。メーコック財団では創始者のアノラックさんが食事の用意をしてくれていましたが、手作りのカレーを食べた後、麗澤と聖学院の関係者で食中毒症状を呈した人が多数でてしまいました。そのカレーは一日前に作られたものであり、常温で保存されていたためカウエルシュ菌が増殖してしまったものと思われます。同じものを食べても現地の子どもたちには症状がなかったので、免疫の違いも感じました。電気の供給も不安定で、すべての食材が入るような大きな冷蔵庫もありません。

以上のことより、私は日本という環境を当たり前だと思って生活してはならないと思いました。この国に生まれたことに感謝し、タイでの経験を活かしながら、日々生活していきたいと思います。